

# 医療ツーリズム 受け入れの動き

## 外国語通訳常駐の病院も

治療目的で来日する「医療ツーリズム」の患者を受け入れる動きが県内の病院でも現れている。外国語での対応や人材確保への不安から、受け入れに慎重な病院が多いが、アジアでは日本への医療ツーリズム需要が高まると専門家は指摘している。

昨年12月、中国・浙江省の女性が名古屋共立病院（名古屋市中川区）に4日間入院した。透視治療や全身のPET（陽電子放射断層撮影）検査を受けるためだ。女性は医療目的で台湾を7～8回訪れたことがあるが、この病院で治療を受けるが、この病院で治療を受



●日本を旅行中に名古屋共立病院で診察を受ける中国人患者（左）＝名古屋市中川区、同病院提供

2017.05.23 朝日新聞

こちらの記事は発行元の許可を得て

掲載しております。

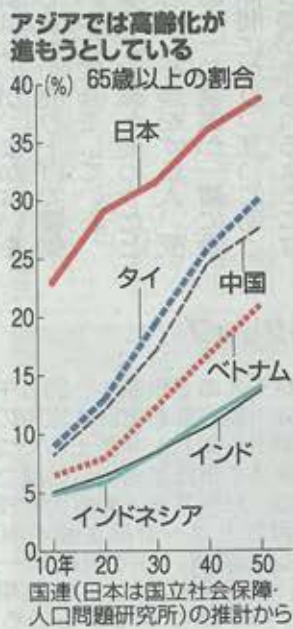
承諾番号：A17-0477



療報酬の約2倍。「お金はかかるが、健康がやっばり一番」と話す。

同病院は中国語や英語の通訳を常駐させるなどして体制を整備。2015年には、外国人患者の受け入れ医療機関としての認証を日本医療教育財団（本部・東京）から得た。15年度の外国人の入院患者は約1000人。前年度から3倍以上に増えた。

病院を運営する医療法人「偕行会」は、人口減少で



「偕行会」は、人口減少で

だが、県内の多くの病院は医療ツーリズムの患者の受け入れに慎重だ。昨年の県の調査に答えた201病院のうち、受け入れているのは19病院で、132病院が予定がないと答えた。課題や消極的になる理由

## アジア高齢化 高まる需要

日本の医療市場が縮み、病床が余りかねないと懸念する。川原弘久理事長は「今のうちに体制を整え、マーケットを広げる努力が必要だ」と話す。

藤田保健衛生大病院（豊明市）は18年春、外国人専用のフロアを病棟につくる。患者増を見越し、専用病室を今の5室から、20室ほどに増やす。

同病院によると、中国では定期的な健康診断が浸透しておらず、病気を早期に見つけられる検診需要も高まっている。国外からの患者は富裕層が中心で、約1500万円の治療費を一括で支払う人もいたという。

は、外国語を話せる医師や看護師の不足が最多。書類や食事などでの対応が難しいとする病院も多かった。

結果によると、糖尿病患者は中国が約1億1千万人、インドが約6900万人。日本の約720万人をはるかに上回る。

藤田保健衛生大の星長清隆学長も「優秀な職員や専用施設をそろえるには投資が必要だし、我々のメインはあくまで日本国内の保険診療。受け入れは全病床（約1400床）の2%程度が限界だ」と話す。

一方、真野教授は「アジアの多くの国の医療水準は低いままだ」と指摘。主な病気の5年生存率などの国際機関の統計から、「日本の医療は少なくともアジアでは断トツだ」と話す。

世界医療事情に詳しい多摩大学大学院の真野俊樹教授（医療経営学）は「アジアは経済成長が進み、慢性疾患やがんの患者が増えている」と話す。国際糖尿病連合が15年に発表した調査

国連人口基金の推計によると、アジアでは急速に高齢化が進み、12年の約4億5千万人から、50年には12億5千万人まで増えるという。真野教授は「アジアの医療市場は拡大し続けている。良い医療を求め、患者が国を渡る流れは止まらない」と話している。